

ミュージカル

ブロードウェイ・ミュージカルのこと

博多のキャナルシティの劇場が劇団四季の劇場になって、このところすっかりミュージカルづいて、演目が変わると出掛けたくなくなります。先日は「クレージー・フォー・ユ」を観ました。佐世保から博多まで出掛けるとなると、入場料の他に高速料金や駐車場代なんか掛って、高いものにつきますが、偶に、文化に接するための費用ですから、仕方がない、と思っています。田舎住まいの悲哀です。

映画のミュージカルについては昔、ご披露したことがあります。劇場のミュージカルについては、単発で「ア・コーラスライン」や「キャッツ」をご紹介したのみでした。

私がミュージカルなるものに興味を持つことになったキツカケは何だったんだろうか。思い返して見ると、母の影響ではないか、と思うのです。母は、宝塚が好きでした。多分、私がまだ小学校に入る大分前のことだと思うのですが、母と叔母と一緒に、宝塚を観に行った記憶があります。演目が「ピノキオ」でしたが、ピノキオが檻の中に入れられて唄う「再び春は巡り来て」とか言う悲しい歌を、泣きながら聴いていたのをウッスラ覚えていて、そのメロディがまだ頭の中に残っています。宝塚は、学生時代に大野木夫人のママ一行と行った記憶があるし（演目は忘れたけど、主題曲の「君ありてこそ」は覚えています）、四年の秋、最後の三商大戦に神戸で負けた後、その翌日でしたか、本場の宝塚に行きました。誰かに付き合っただけで貰ったのでしたっけ。こんな不心得者の主将がいたので、三商大戦に勝てなかったのかも知れません。

ミュージカルの歴史について、少し勉強してみました。起源はやはり、オペラだそうですね。十六世紀の終り頃、フィレンツェの貴族が、ギリシャ神話を題材にして古代ギリシャ劇を始めたのが、オペラの始まりとされていますが、その後、これに喜劇の要素を

加味して、ロンドンではコミック・オペラ、パリではオペラ・コミック、ウイーンではオペレッタになったのだそうです。これがアメリカに渡って、アメリカン・オペレッタになり、一九一〇年代から二〇年代の後半に掛けて、黄金時代を迎えたと言います。本格的にストーリーを持ったミュージカルは、二七年初演の有名な「シヨー・ボート」。現代ミュージカルの始まりは、名曲「オールマン・リバー」を生んだ、この「シヨー・ボート」だったとされています。これは映画になったのを観たことがあります。

ミュージカルの初期の隆盛に忘れてならない歌手が、エセル・マーマン。ブロードウェイの女王と言われたそうです。最初の当り役が、三〇年初演の「ガール・クレージー」。先日観た「クレージー・フォー・ユー」は、九二年初演ですが、「ガール・クレージー」の焼き直しです。これが大当たりで、三〇年代はミュージカルの花盛りということになります。タップ・ダンスのフレッド・アステアやジーン・ケリーなんかが活躍したのは、この頃のことでした。我々の年代には馴染みの深い「インディアン・ラブ・コール」(「ロース・マリー」)や「恋人よ、我に帰れ」(「ニュー・ムーン」)、「ナイト・アンド・デイ」

「ザ・ガイ・デボース」でフレッド・アステアが唄った）や「煙が目に沁みる」（「ロバート」）、「サマー・タイム」（「ボギーとベス」）などの名曲は、皆この頃のミュージカルの主題曲（括弧の中に書いたのが、ミュージカルの演目）です。エセル・マーマンは四六年に名作「アニーよ、銃を取れ」の主演もしています。「アニーよ、銃を取れ」は、ベティ・ハットンとハワード・キールの主演で映画化されています。ハワード・キールと言えば、先日来、テレビで「掠奪された七人の花嫁」を何度かやっていました。これもハワード・キールとジェーン・パウエルのミュージカルもの。尤もこれは舞台から来たものではないようです。

ミュージカルの作曲家リチャード・ロジャースと作詞家オスカー・ハーマンスタインの名前は、皆さんもどこかで聞いたことがあるでしょう。このコンビが一時代のミュージカルを完成させたと言われます。四三年の「オクラホマ」、四五年の「回転木馬」、四九年の「南太平洋」、五一年の「王様と私」、五九年の「サウンド・オブ・ミュージック」。「これらの不朽の名作は、いずれもこのコンビが作ったもの。皆、映画化されてい

ますが、私はいずれも舞台を観たことはなく、全部映画で観ました。それ以外でも、五六年には「マイ・フェア・レディ」、五七年には「ウエストサイド物語」、六四年には「ハロー・ドーリー」、同じく六四年には「屋根の上のバイオリン弾き」と「ファニー・ガール」、六五年には「ラ・マンチャの男」、六六年には「キャバレー」等が出ています。

六七年には、全裸シーンで有名になった「ヘアー」、続いて同じ系統の「オー・カル Катта」が六九年に初演されています。七一年の「ジーザス・クライスト・スーパー・スター」を含めて、これら三作は反体制派のミュージカルと言っても良いのではないでしょうが。

「マイ・フェア・レディ」は、レックス・ハリソンとオードリー・ヘップバーンの映画で、テレビを含めて何度も観ました。「屋根の上のバイオリン弾き」は、ソニーの故盛田昭夫さんが日本での大当たりを予言し、森繁久弥のテヴィエ役の大当たりで超ロングランになりましたが、残念ながら私は観る機会を得ませんでした。実は、「オー・カ

ルカタ」は私が初めて劇場でミュージカルを観た演目なのです。七一年に初めてロンドンに出張した時、その直前に故岡崎がニューヨークで観て、この珊瑚の誌上で、凄かった、と紹介していたのを思い出して、自分でチケットを手に入れ、一人で抜け出して観に行きました。全編スツポンポンの全裸で踊るショーは凄かったけれど、セックス関連の汚いスラングのヤリトリが全く理解できず、周りのお客さんが、ヒックリ返って大笑いしている中で一人笑えなくて、淋しい思いをしたのでした。「ウエストサイド・ストーリー」は映画やテレビで何度も観ましたが、九一年にオランダに長期出張している間に舞台を観ました。これがオランダ語版だったのですが、オランダ語はゴツゴツしている、ミュージカルには向いていないな、と思いました。「ヘアー」も同じく九一年にオランダに来たのを観ました。こちらは本場ブロードウェイから来たものでしたから、英語版で中々良かった。「ジーザス・クライスト・スーパースター」は私が二年間ロンドンにいた間中、同じ劇場でやっているのを知っていましたが、不思議なことにこの間は観に行く機会がなく、その後、出張中に時間を見つけて行きました。これを何時観た

のか、この記録だけが見つかりません。

七〇年後半から八〇年代に入ると、本場アメリカのブロードウェイ・ミュージカルは映画とかテレビに押されて、下火になったとされています。「ジャック」とか「ピピン」なんか、本場から来たものを、娘と東京の劇場で観たのは、八二年と八三年です。ダンスが素晴らしいと思いましたが、いずれも大当たりにはなりませんでした。「ア・コーラスライン」の初演は七五年ですが、私は八七年にニューヨークで観て大好きになり、九九年に博多で劇団四季がやったので、また観に行きました。四季のものもそれなりに良かったけれど、比較するとやはり本場の方が、パンチがあって迫力があつたような気がします。「ア・コーラスライン」はブロードウェイでのロングランの記録を持っています。一九七五年の初演後、六一三七回という断トツの記録が残っています。次ぎが、ジョン・トラボルタの「 그리스」、 「屋根の上のバイオリン弾き」と続いています。これらは三二〇〇〜三〇〇〇回ですから、「ア・コーラスライン」の記録が如何に凄いものか、が判ります。因みに、第四位、五位は「ハロー・ドーリー」、「マイ・フェア・レ

「デイ」で二七〇〇回、八〇〇回程度となっています。「ア・コーラスライン」は、本場のものももう終わってしまっているようです。八一年初演の「ソフィステイケートド・レディズ」を観たのは、八三年八月ラス・ベガスでのこと。ロス・アンジェルズに出張していた時、一緒に行った造船所のエンジニアを唆して、週末の博打をエサにラス・ベガスまで行って、博打もソコソコにミュージカルに付き合わせたのでした。これはミュージカルというより、デューク・エリントンの音楽を紹介する音楽ショーの感じでした。これは直後の八三年十一月、東京で再度娘と観ました。そう言えば、八六年にロンドン出張中に「フォーティ・セカンド・ストリート」と言うコミックのミュージカルを観ていますが、これも同行した直属の部長を上手いこと唆して一緒に行ったもの。現場上がりの方で、およそミュージカルにはそぐわない感じの方でした。良い経験をした、と喜んでくれましたが、本当はどう思われたのか……。出張中に観たものでは、八七年にニューヨークで観た「ミー・アンド・マイ・ガール」という小作品があります。「雨に唄えば」を劇場で観たのは八三年、ロンドンでのことでした。これは逆に映画を

舞台化したもの。舞台を映画化したものは数多くありますが、映画が舞台化されたものは多くありません。ハリウッド・ミュージカルでも言えば良いのでしょうか。何度かご紹介していますが、「雨に唄えば」は私が一番好きな映画。普通は映画よりも舞台の方が迫力があるものなのですが、これは映画の印象が強すぎた所為もあって、舞台の方が完全に負けていました。

映画やテレビに押されて、ブロードウェイの本場が下火になった代わりに伸して来たのが、ロンドン発信のミュージカル。「キャッツ」は八一年ロンドンが初演です。この大成功の勢いを本場のブロードウェイに持つて行ったのが八二年。私は八三年にロンドンで観ました。出張中の急な手配でしたから、切符が中々手に入らなかつたのですが、若干のプレミアムを払って、念願の「キャッツ」を観て本当に感激しました。これも大のお気に入りになり、九八年に博多で観ましたが、これは四季のものも中々良かった。日本のミュージカルのレベルも、本場並になつたな、と生意気な感想を持ちました。ロンドン発信のミュージカルは、その後、八四年の「スターライト・エクスプレス」(ブ

ロードウェイ進出は八七年)、八五年の「レ・ミゼラブル」(同じく八七年)、八六年の「オペラ座の怪人」(同じく八八年)八九年の「ミス・サイゴン」(同じく九一年)等があります。「スターライト・エクスプレス」は、昨年二月に、ゆめ駅伝調査団と言うことで、知的障害者の福祉施設の園長さんや介護の先生達とオランダに行った帰り、ロンドンに立ち寄った折、社会勉強だ、と称して、全員を引き連れて観て来ました。ローラー・スケートが客席の上まで走り回る豪快なミュージカルで、特別な劇場が必要なものでしたが、流石に同行したメンバーの半数には苦戦だったようで、居眠りしていました。「レ・ミゼラブル」もお気に入りのミュージカルです。八八年に娘と一緒に鹿賀丈史と滝田栄の日本語版を観て感激し、九〇年にオランダに長期出張中、ロンドンに行った時、行き当たりバッタリで飛び込んで行って見ましたが、急なことでしたから、良い席がある筈はなく、天井桟敷みたいな席でしたが、音楽には酔いしれて来ました。何度観ても泣かされてグズグズになって出て来ます。「オペラ座の怪人」は劇団四季のヒット作。九六年に博多のキャナルシティ劇場で観ましたが、宣伝ほどのことはなく、若干期待は

ずれの思いをしました。

最近、膨大な費用を掛けた大掛かりなミュージカルが求められているとのことで、デイズニー制作のものが受けているようです。今のところ、九四年初演の「美女と野獣」と九七年初演の「ライオン・キング」の二作ですが、これだけ大掛かりなものに対抗できるミュージカルは中々出て来ないだろう、とされています。つい先日、お台場の四季劇場に行き、飛び込みで「ライオン・キング」を見て来ました。当日券なんて売切れてしまつて、なかつたのですが、友達が急に来られなくなって、安くても良いから切符を売りたい、と言うう人に劇場の前で巡り会つ、というラッキーに恵まれたものです。流石に仕掛けは大掛かりだったし、動物の製作物やその動きの工夫は見事でしたが、私のイメージにあるミュージカルとは一寸違う気がします。お金を掛けることが尊重されるのではなくて、昔のブロードウェイの小さな劇場で大ヒットしたような、小粒でもピリツとした、小粋なミュージカルの方が、ミュージカルらしいのではないか、と思つています。

(平成十三年三月五日)

雨に唄えば

毎週毎週 シネマを見るよ

学校へ来るのは 何のため

これは小平の頃、野口兄が年賀状に書いてくれた読み込み都都逸である。頭がチャンとナ・ガ・シ・マになっている。大学二年の頃は本当によく映画を見た。見始めると一種の中毒症状になるのだから、つまらないものですら何か見ないと気が済まない。五〇円持つて国分寺の名画座に、毎週一度は通っていた。一寸途切れると行くのがオツクウになり、余程良い映画でないと見に行かなくなるが、見出すと続く。

「雨に唄えば」と言う映画は、ずい分古い名作である。初めて見たのは高校一年の頃ではなかったろうか。タップ・ダンスのジーン・ケリーとドンアルド・オコーナーのミュージカルで女優は当時売り出しのデビー・レイノルズ（今は、スター・ウオーズのレイア姫役のキャリアー・フィッシャーのお母さんと言う方が判り易いかも知れない）。無声映画からトーキーに移る頃の話ミュージカル風に仕上げたもので、筋もたわいのない

ものだが、何度見ても面白い。筋が簡単なだけに飽きないのかも知れない。長崎で二・三度、それも一度映画館に入ると最終回まで二回や三回は見る。東京に出て来てからも新聞の広告で見つけるとその映画館を捜して行ったものだ。今にして思えば、三鷹から池袋とか下北沢とかずいぶん色んなところへ行った記憶がある。回数にして十三・四回見ているのではないだろうか。「グレン・ミラー物語」も何度か見たがこれほどではない。

先日、この「雨に唄えば」をテレビ映画でやっていて。時間の関係上、少し省いてあるところもあったが、相変わらず面白かった。翌日、三菱商事と組んでやっている仕事かどうにも上手く行かず、担当者同志上司から散々小言を言われ、対策を考えろ、とか言われて会議室に入った。二人とも当然面白くない。懸命にやった結果を攻められてもどうしようもないよな、に始まり、暫くグズグズしていたが、昨夜は名画劇場を晩くまで見てね。ア、ジーン・ケリーだろう。ソウソウ。そいつもお気に入り、五・六回は見ているらしい。スツカリ嬉しくなつて、最後のシーンで涙に濡れて振り返つたデビィ・レイノルズの顔が良かったの、あの顔が良いと言つので似ている同級生と結婚して

しまった奴がいる、とか、一晚中悩み抜いて夜明けに解決方法を発見し、主役三人が唄って踊る「グッド・モーニング」と言う曲がよかった、とか、やはり圧巻は雨の中でジーン・ケリーが唄う主題曲だ、とか、スツカリ意気投合してしまい、一時間以上そんな話をしてサツパリして会議室から出て来た。「どうした対応策は。」「まずまずデス。」

あれだけの名画である。また、アンコールで何度もテレビでやるとは思いが、一度テレビでやってしまつと、もう映画館では見られないかもしれないのが残念である。

このところ、テレビ映画も馬鹿にならない。自分の時間が不規則なので、連続ものはあまり見ないが、良い映画をやるときは楽しみに見ている。先日も「ナバロンの要塞」をやっていた。二回に分けた内の前編だけしか見られなくて残念だった。テレビ映画を見ているとどうしても夜が遅くなる。翌朝辛いのが玉に傷、ということ。

(昭和四十七年十月二十一日)

ミュージカル「キャッツ」を見る

私はいつだったか紹介した「雨に唄えば」の昔からミュージカルが好きで、若い頃見た映画もミュージカルものが多いのです。「オクラホマ」、「アニーよ銃を取れ」、「掠奪された七人の花嫁」、「回転木馬」、「南太平洋」、「王様と私」、「マイ・フェア・レディ」、「ウエストサイド物語」、「サウンド・オブ・ミュージック」等。ブロードウェイでヒットした劇場ものが映画化されたのが殆んどです。

一寸キザですが、最近ではニューヨークとかロンドンへ行くと、出来るだけ時間を作つて一晩はミュージカルを見る機会を作ることになっています。会社の金を使つての出張ですから、本来なら全行程、朝から晩まで仕事をせねばならず、夜も駐在員や商社の人、出来れば客との接触到に努めねばならないところなのですが、少し長い滞在なら、一晩位カンベンしてくれ、と言つことにしているわけです。ロンドンにいる間はあまり機会がなくて、バレエやオペラ、シエクスピア劇を見た他は「ジーザス・クライスト・スーパースター」、「オー・カルカタ」を見たくらいだったのですが、あと出張で行つてニューヨークの本場のブロードウェイで、今はやりの「ア・コーラスライン」を観たし、ロ

ンドンで「雨に唄えば」、ラス・ベガスで「ソフィステイケーテッド・レディーズ」を観ました。いずれもそれなりに感銘を受けたのですが、中でも五十八年十二月にロンドンで観た「キャッツ」は今でも忘れられません。

あの時は欧州各地を回っていて、金曜日の夜、ロンドン入りすることになったのでした。誰かに貰ったロンドン・タイムズに、「キャッツ」が評判だ、と書いてあるのを見つけて欧州の何処かからロンドンの友人に電話して、切符が手に入らないか頼むと、本来なら翌年の五月まで満席とのことでしたが、少しくらいプレミアムを払っても良い、と言ったのが利いたのか、あるルートで切符が取れた、との連絡がありました。土曜日の夜の券が急に取れるなんて全くのラッキー。プレミアムも十三ポンドが十七ポンドになった程度ですから可愛いものです。土曜日は夕方の開演だったのですが、昼前にはホテルを出て劇場の予約係のところへ行ったり、エージェントに行ったりで、まず切符を確保し、大事に抱えてようやく食事して開演を待ちました。

ストーリーは宗教的なものが入っているので良く判らないのですが、何でも野良猫の

一団が、天国に行けるジェリクル・キャットなる猫を一匹選ぶことになります。自薦・他薦の部分が歌と踊りになるわけですが、最後に、年老いて仲間外れにされている汚い雌猫が、奇麗な心を持っているということ選ばれて神に召されると言つたもの（らしい）です。

まず仕掛けが大変です。日本では新宿にこのための劇場が建てられた、と言いますが、本当かと思えます。舞台が四方と言つて大袈裟なら三〇〇度くらいの角度から見えるようになっていている円形のもです。装置・背景は全く変えず、ここで歌つたり踊つたりするのです。

開演のベルが鳴り、真つ暗になると客席のアチコチで猫の眼に擬した二個組みの電球がチャツチャツと光ります。私も目の前でピカツとやられて飛び上がりましたが、舞台の猫の扮装をしたスター達が客席を走り回つて客の目の前でピカツと電気を走らせているのです。これが段々に中心に集まつて来ると舞台上に薄暗いライトが当つて、もうそれは色んなところから野良猫達が集まつて来るのです。ゴミ捨て場の一角と言つ設定で

すから回りはガラクタだらけ。そのガラクタのアチコチの蔭から、客席側から、果ては舞台の下から、静かにしなやかに大勢の猫が舞台の上へ上がって来て夫々にポーズを取ります。集まったところで速いテンポのプロローグのテーマに始まり、絢爛の舞台がオープンする訳です。

早い動きのダンスと、ソロありコーラスありの歌。あの連中の舞台上上がるまでの修行と競争の激しさ厳しさについては、別のミュージカル「ア・コーラスライン」で見せられました。一人一人が大変な才能の持ち主だと思います。ダンスのステップにしても、ここは絶対にこの位置に來なければならぬ、ということところへ一分の狂いもなくピタッと納まるという感じ。ダンスの判らない私にもそんな雰囲気を感じられます。

圧巻はやはりテーマソングの「メモリー」。年老いた汚い扮装の雌猫が過ぎ去った良い時代を懐かしんで高い澄んだ声で「メモリー」を歌い始めると、内容は判らなくてもジーンと來ます。こう言うのを舞台上に酔う、と言うのでしょうか。ただただ感激してしまつて、気が付いたら大勢の観客にもまれながら劇場の外へ吐き出されつつあつた、とい

う感じでした。人込みの地下鉄なんかに乗るのがもつたいなくて、小雨の暗いロンドンの街を憶えたばかりの「メモリー」を口ずさみながらホテルまで歩いたことでした。

(昭和六十一年二月二日)

マンマ・ミーア

「A B B A」というスエーデンのグループ・サウンズに興味を持ったのは何時頃のことだったでしょうか。もう二〇年以上も前だったのではないかと思います。男性二人、女性二人のコーラスのハーモニーの美しさと、パンチのあると言うか、ドスの効いた素晴らしいリズムが何とも好もしくて、早速レコードを一枚買って繰り返し聴きました。このグループの初期のものと思われるこのレコードは、今も大切にしています。その後、CDも買って、ドライブ中に聴いたりしていますが、レコードもCDも何年に作られたものか判らないので、何時買ったものか判らないのです。このグループの最盛期は七〇年代の後半から八〇年代に掛けての十年足らずのことだったようですから、私が興

味を持ったのもやはりその頃だったのだらうと思います。(思い返してみると、この頃はまだレコードが主体だったのですね。今やレコードはCDに押されて小さくなっています。レコード・プレーヤーを探すのすら大変なことです。時代の変化の速さを感じます) ABB Aは奇抜な衣装や動きが話題だったようですが、私はそのことは知らず、単に音楽のみが気に入っていました。この四人は、ツープアの夫婦だったことも後で知ったことですが、その後二組とも別れて、このグループも自然解消したようです。男性二人がその後も音楽活動を続け、八〇年代後半からミュージカルに力を入れているのとこのことです。

昨年夏、ロンドンへ行ったとき、「マンマ・ミーア」と言うミュージカルの存在を知りました。どうやらアバの曲を中心にしたミュージカルらしい。そう言えば、アバのCDの中に「マンマ・ミーア」(イタリア語で「オヤ、マア! ビックリした」と言うような意味です)と言う曲もありました。ミュージカル「マンマ・ミーア」は一九九九年四月ロンドンで初演、その後ニューヨークでの初日が二〇〇一年十月とのことです。こ

れは何時の日か是非観てやろう、と思っていました。

劇団四季は浜松町に「春」と「秋」の二つの劇場を持ち、更に大阪・名古屋・福岡にも専用劇場を持っていますが、昨年十月に汐留に電通本社のビルが出来、これに併設して新しい四季劇場「海」が完成しました。四月に上京したとき、この「海」劇場の柿落としに「マンマ・ミーア」が上演されていることを知り、少々苦勞して切符を手に入れて観て来ました。

汐留と言うと、新橋駅の、烏森の飲み屋街と線路を挟んで海側のゴチャゴチャした汚いところ、貨物列車の引込み線の線路ばかりが沢山あるところ、という印象でしたが、今やウオーターフロントとして立派に開発されています。開発が遅々として進まなかったのは、開発徒次に遺跡が発見されて、その掘り起こしと保存に時間が掛かっていたからだ、と聞いたことがあります。新橋の駅を海側に降りると、明るくて広々とした地下街が続いています。昔は地下街と言うと狭くて暗くて圧迫されるような印象がありましたが、この地下の通りは明るくて広くて圧迫される感じが全くないのです。お店がまだ

ギッシリ入って来ていないせいかも知れませんが、少し距離がありますが、気持ち良く歩いて行くと、ビルに囲まれた中庭みたいな素晴らしい空間に出ました。中央に噴水があって巨大な彫刻に囲まれています。この突き当りが電通本社でその隣が「海」劇場なのです。カレッタ汐留と言う、浜離宮を見下ろす隣のビルに入って簡単な食事の後、劇場に入りました。席数は一二〇〇のことですが、コンパクトにまとまった感じ。私の席は二階席でしたが、何でもこの劇場は、普通の劇場より二階部分が大きくせり出しているとのことで、舞台が近く感じられました。舞台を観るには二階席の方が良いのではな
いか、ということのを再発見しました。オーケストラ・ピット（通称オケピ。この程、三谷幸喜が同名のミュージカルを作ったと聞いています）も覗けるし、舞台上の低い位置での演技も良く見えます。

筋は、年頃の娘を持った未婚の母がこの娘と二人でギリシャのエーゲ海の島でホテルを経営しています。この母親は、若い頃舞台の人気歌手だったのですが、恋の過ちで娘を生んで引退したものの、父親の可能性のある男が三人いて、その内の誰が父親だか判

らないのです。娘は近々オーソドックスな結婚をする予定なのですが、母親の日記で自分の出生の秘密を知り、父親と一緒にバージン・ロードを歩きたい、と言う希望を持つて、母親に内緒で三人の候補者に結婚式への招待状を出します。男女関係に対する観念が、母の方が飛んでいて娘の方が古風、と逆転している感じなのも面白いと思いました。この母親の時代になると、母親の考えが古くて娘の方が新しい、と言う感覚ではなくなるのだろうか。これから始まるゴタゴタがストーリーになる訳ですが、音楽は全部アバの曲で合計二十二曲。歌詞も一ヶ所“he”を“you”に変えた程度だったとのこと、アバの曲を上手に繋げたストーリーになっていました。ですから日本語の歌詞も、英語から翻訳するのに、アバの曲全部を作詞したと言うアバのオリジナル・メンバーの男性の厳しいチェックを受けたとのこと。最初から最後までパンチの効いた、聴き慣れたアバの曲が流れ、好きなものにはたまらないミュージカルです。二時間半がアツという間に過ぎていました。

日本のミュージカルも素晴らしいものになりました。才能のある若い人たちがドンド

この世界に入って行っているのが判ります。オーディションで採用されて行くのでしようが、東京芸大出、なんて人も何人かいました。主役の母親、ドナ・シエリダン役をやったのは、保坂知寿と言う女優ですが、歌も踊りも演技も抜群。「キャッツ」「ジーザス・クライスト・スーパースター」「クレイジー・フォー・ユー」などに主演した四季の看板女優です。四季はスター俳優を作らない方針だと聞いたことがあります。この人はもう立派な看板女優。前田美波里が出演していて、流石に貫禄のある演技と歌と踊りを披露してくれていました。美波里も幾つになつたのか、相変わらずキレイで素敵なスタイルを見せてくれましたが、保坂知寿のパンチ力は美波里を上回る迫力でした。私はどうやら重厚なモーツアルトのオペラよりも、軽いミュージカルの方が性に合っているようです。次は何をやってくれるのだろうか、楽しみにしています。

劇団四季の浅利慶太が文芸春秋に連載を始めています。日生劇場の立ち上げから始まっていますが、石原慎太郎や小沢征爾との付き合い、東急グループの五島昇、日本生命の弘世現、三井不動産の江戸英雄などの後押しで、日本のミュージカルが育っていった

経緯が紹介されています。松下幸之助の支援の話も出て来ます。四季の立ち上げ辺りではソニーの盛田昭夫なんかの話も出てくるのだらうと楽しみにしています。昭和三十五年ごろのこと、我々が大学を卒業した頃のことです。この頃は経済人のトップにもこうしたロマンを持った人たちがいたと言うことでしょう。今回「海」劇場が電通のビルに併設されたのも、電通会長の成田豊さんと浅利慶太との付き合いが原点になるわけですが、これも昭和五十年の都知事選挙で、美濃部亮吉と戦って負けた石原慎太郎を担いで選挙運動の頃から付き合いと言います。最近の経済人は、自分の頭の蠅を追うのに忙しくて、ロマンを持つ余裕なんてないように思っていました。こうした気持を持つ人たちがいることを知って、まだ日本も捨てたものではないな、と思っています。

(平成十五年六月五日)

私は中学・高校の頃から落語のファンでラジオ聞くのを楽しみにしていたが、最初に落語を観たのは、大学一年か二年の頃、柔道の練習をサボって、野口兄に連れられて新宿かどこかの寄席に連れて行って貰った時のことだった。その時、誰が出演したのか、記憶が定かではないが、あの頃は、文楽、志ん生、柳橋、可楽、金馬（先代）、三木助（先代）、円歌（先代）、痴楽など大名跡がキラ星の如く並んでいた、円生や小さんなんかはまだ中堅どころ、という感じだった。その後も、寄席には通ったが、志ん朝が好きになつてからは、落語ファンというより、志ん朝ファンになつてしまい。亡くなってからは落語に対する熱が大分冷めて

いる。この辺を書いたものを紹介する。

古今亭志ん朝

ロンドンでの二年間、流石に日本が恋しくて、日本から食べ物やら本やら色々送って貰ったが、楽しみにしていたものの一つに録音カセットテープがある。親類が集まったときのもの、娘のピアノ演奏会、大相撲実況、音楽番組や寄席番組を吹き込んだもの、等々。カセット・ラジオを買い込んで車に積んで通勤の徒次に聞いたり、台所で炊事をしながら聞いたり。この中に志ん朝の落語、「品川心中」と「火焰太鼓」があった。

ずい分昔「夢で会いましょう」というテレビ番組があつて、短い番組だったが好きで良く見ていたが、その中の端役として出て来る、一寸色男だが、何か嫌味なキザな若いのがいて、これが志ん朝だったと思う。若い落語家のくせにテレビに出てチャラチャラして、本業の落語の方はどうなっているのか分からない。気にも留めていなかったし、むしろ目障りだった。

志ん朝と言えば、言わずと知れた名人志ん生の息子。兄が馬生。馬生の方は派手さがなくてジツクリやっていたみたいだが、こちらの方は地味すぎであり好きではない。志ん朝もいつから心を入れ替えたのか、本業に力を入れ始めたらしく、テレビにもサツパリ出なくなっていて、忘れていた位だった。

そこへ日本を離れて聴いたテープ。語り口の軽妙さ、明るさ、テンポの早さにスツカリいかれてしまつて、擦り切れるほど聴いた。今も吹き込み直して持つているが何度でも聴ける。日本に帰つたら本場を見に行つてやろう、と思つていたが中々チャンスがない。折角なら名人会に行つてジツクリ聴きたいと思うが、大体名人会なんてのは六時とか六時半とかの開演で、会社が終つてからでは時間が合わない。それでも一度だけ、新聞広告を見て、会社を定時で飛び出して国立小劇場へ行つてみたことがあるが、当日券なんて一枚もありはしない。受け付けの人に、前売り券も持たずに来るなんて、なんて物を知らない人だろう、と言つような顔をされて頭に来た。ということ、まだ一度も観ていない。

偶にテレビでやるときは何とか無理をしても観ることにしている。番組を見ても無意識に探している所為か、パツと眼につく。大抵十一時過ぎからやるから、まともに帰れば何てことないが、何か予定が出来たりすると、大変な苦勞をして逃げ回ったりする。二年前大晦日に火焰太鼓を観たときは、やっと観られたと思つたら嬉しくて涙が出た。

このところテープを買っている。もっとドンドン出せば良いと思つのに、出し方も遠慮深くて謙虚なところがあるみたいで、これが又良い。CBSソニーから七巻まで出ているが、新しいのが発売された、という広告が又不思議と眼につくので直ぐに買う。廓もの、太鼓持ちの話、富くじの話なんか面白い。得意の分野からテープにしているのだらう。聴くのは殆んど車の中。前はゴルフへの行き帰りに良く聞いた。長い運転が全然苦にならない。今は情けないけど病院の行き帰り。良い気晴らしにはなる。

とにかく小気味の良い軽くて明るいテンポが身上。あまり変な説明をつけないで、登場人物のヤリトリで繋いで行く語り口がたまらない。

これからもテープは買うだらう。テレビ番組も探すだらう。でも何とかして本物を見

たい。東京にいて機会には一番恵まれている筈。もう少し努力する必要があるのかもしれない。もつとも今は一日も早く今の異常状態を脱け出して生活を正常にするのが先決だろう。

今持っているテープは

富久、愛宕山、居残り佐平次、三軒長屋、柳田格之進、

付き馬、佃祭

(昭和五十五年八月十五日)

桂 枝雀

大分昔に、古今亭志ん朝のことを書いたことがあります。志ん朝のテープはソニーが出していたので、新しいのが出るのを待つて買い揃えて、二十三巻まで揃えたのですが、その後、パツタリ出て来なくなつて残念です。父親の志ん生譲りの「火焰太鼓」は既に一級品だし、大分前にラジオで聞いた「品川心中」なんかも完成品だと思つのに、まだ出て来ません。発売されたら買ってやろう、と思つているのに中々出て来ない。落語人

口が減って、テープを出しても採算に乗らないと言つことなのだろうか。ファンとしては残念な思いです。テープを聞くのは殆んど車の中。東京にいた頃は、ゴルフ場への行き帰りが多かったけれど、こちらに来てからは、通勤の往復に繰り返し聞いています。

私も東京にいる頃から、寄席に行きたいと思つていました。ロンドンにいた頃、帰つたら寄席に行くんだ、志ん朝を聴きに行くんだ、と考えていたことを思い出します。それが帰つてもう十五年もなるのに、結局一度も行つていない。実は一度だけ、志ん朝の独演会があるというので、三宅坂の国立劇場まで行ったことがあるのです。当日までは行けるかどうか自信がなかったので、前売券は買わずに飛び込みで行つたのですが、満席だったらしく、当日になって、それも遅れて来るなんて非常識だ、といった応対をされて、スゴスゴと引き下がつたのでした。それ以来、努力もしていかないと言つのは、忙しいと言つよりも、これはもう怠慢と言つことでしょう。と言つことで、志ん朝の高座は未だ見たことがありません。テレビで見たことがあるのみ。先日、福岡まで来ることを新聞で見て知りましたが、今の状態で落語を聴きに態々福岡まで出かける訳にも行

かず、見送りにしました。落語が芸術かどうかは別にして、田舎住まいをすると、こう
した芸術に触れる機会が少なくなりませぬ。首都圏に住んでいた頃から、首都圏にいる
こと自体こんな面では恵まれているのだから、出来るだけこうした機会は利用しなけれ
ば、とは思っていたのですが、中々思い通りに行かず、その有り難味を充分に享受出
来ないまま、こちらへ来てしまつたようです。それでも都会にいた頃は、回数は少なく
ても、時々娘とミュージカルなんかを聴きに行つたりしていましたもの……。やはり
文化の地方分散化も必要なのかも知れませぬ。そういう意味ではハウステンボスも一
つの街として機能する訳ですから、文化の中央集権化を緩和する役割を果せると良いと
思います。……。本当に好きな人は飛行機代を払つても出掛けて行くのでしょうか、相
当限られた人になるのでしょうか。先日長崎で、労音が外国人のグループを招んで、ブ
ロードウェイ・ミュージカルのエッセンス版をやるというので、無理に抜け出して長崎
まで出かけて聞いてきました。一流とは言い難いグループの公演でしたが、雰囲気は味
わえるし、音楽自体は懐かしいものばかりですから、それなりに楽しんでできたことでし

た。長崎まで出るのにも一時間掛かりますから一仕事。ましてや福岡、大阪、東京なんか大都会に出るとなると大変です。落語について言えば、こちらの人はあまり落語には興味がないのか、テレビですらやっていないみたいです。(このところテレビどころではないので詳しくは判りませんが)そちらで志ん朝がテレビに出ると娘が気を利かせてビデオに撮っておいてくれるので、出張した時に見る程度です。

落語と言つと、あまり大きな顔をして文化だ、芸術だ、と言えないのかも知れないけれど、私は堂々たる芸術だと思っています。勿論、人にもよりけりで、単なる芸人、芸能人という人もいますし、本当に練り上げた芸術家もいます。ここ何年も寄席に行っていないので、最近どんな落語家がいるのか、どんな有望な若手が出て来ているのか知りませんが(昔、野口兄と新宿の寄席に行った頃が、一番その辺を知っていたのかも知れません)。野口兄、最近の情報を教えて下さい)、今、志ん朝に続いて面白いと思うのが、関西の桂枝雀。ややドギツクで、これでもか、これでもかと言う面がありますが、関西の芸能と言つのは、一体にこんな傾向にありますから仕方がないのでしょう。ジツクリ

聞かせると言うより、騒々しくガチャガチャと畳み掛ける落語。仕草や表情が重要な要素になりますから、むしろテレビ向きの落語家なのだと思います。

長崎オランダ村には、大入り、と言う古風な制度が残っています。大勢のお客様が入って頂いた日は、皆が忙しい思いをしたので、ご苦労さま、ということ、社長から新入生まで金額一律の大入袋を貰います。最低が五〇〇円、多いときだと五〇〇〇円を超える時もあります。年にすると一〇万円を越える金額になるので、重要な収入源として喜ばれている制度です。私も最初は何となく貰っていたのですが、途中で、出向者の身で貰うのも変なものだ、と言うことに気がついて、辞退することになりました。それまで貰った分は、何となく別にして貯金箱に取ってあったのですが、これを返すのも変なので、これは貰いっぱなしにすることに、これで桂枝雀全集のテープを貰うことにしました。二十五巻あるので車の中で取替え引き換え聞いています。

東京の落語と関西落語では、同じ題材でも演題が違います。「粗忽の釘」と「宿替え」。「堀の内」と「いらちの愛宕参り」。「時そば」と「うどん屋」等々。それと同じ筋でも

面白さのポイントの置き方が違ってきます。どちらかと言えば、東京はストーリーで聞かせる傾向にあるのに対して、関西は話術とか仕草の面白さで聞かせる傾向にあるような気がします。この辺は志ん朝と枝雀の芸風の違いかも知れません。

枝雀で特徴的なのはマクラ。確か神戸大学中退と聞いたことがありますが、そのせいか何となくインテリっぽいマクラでこれが面白いのです。それとテレビで何度か見たことがありますが、動きが面白い。何か速いんですね。動作が速くて面白い。上手く表現できないので、動作が速いのがどうして面白いのか、理解していただけないと思います。英語で落語をやっているのも、この人位のものではないでしょうか。それも面白い英語にして日本人に聞かせるのではなくて、実際に外国へ行って外国人に聞かせている。偉いものだと思います。かなり酷い英語なので、少し恥ずかしい気もしますが、後は得意の動きや表情で理解させ、笑わせているのでしょう。

一番気に入っているのが「貧乏神」。怠け者に取り付いた貧乏神が、その怠け者に「頼むから働いてくれ」と頼む羽目になり、終には貧乏神自身が女房代わりを勤めさせられ

ることになって、毎日洗濯の内職に励みながら、女房面をしている場面なんて、何度聞いてもおかしくて車の中で笑ってしまいます。

考えてみると、運転しながら一人で笑い転げている男を見る対向車の人は、さぞ気持ちが悪い思いをしていることでしょうね。

（平成四年七月二日）

落語について

このところ、毎月紹介してくれる野口兄の落語の話に触発されて、私も好きな落語のことを書きたくなりました。私がつけているテープは、前にも紹介したように、志ん朝の全集と枝雀の全集が主ですが、円生、小さん、志ん生他のものも数本ずつ持っています。最近、レコード屋（最近はレコード屋も様子が変わりました。CDが幅を利かせていて、レコードを探すのが難しいほど。レコード針を探すのも大変ですね。テープも偶の方に遠慮がちに置いてあります）で発見すると、志ん生のテープを少しずつ買っています。未だに志ん朝が一番好きなのだけけれど、ソニーで二十四巻まで出たら、後が出な

いので残念に思っています。落語自身の人気がなくなって来たとも思えないので、本人に何か考えることがあって出さないのではないかと思っていました。最近、通信販売で、CDで続編が出たことを知ったので、先日求めましたが、殆んどが前のものと同じで、追加の話は五編位しかありませんでしたから、やはり志ん朝は今の時点で、自分の話を録音に残すことに、ある種の抵抗を感じていると言っていることではないかと思えます。まだ、完成されていない、このまま後世に残すのは恥ずかしい、と思っっているのではないのでしょうか。分類の都合上、私が持っている落語のテープとCDを、エクセルに打ち込んでみたら、重複分（話は同じだが、演者が異なるものや、演じた時点が違うもの）を含めて、全部で一二三話分のテープを持っていることが判りました。野口兄は季節ごとに分類していますが、私は、ジャンルで分けてみたいと思います。この他「落ち」で分類しても面白いかも知れませんが。

落語の演題と言つのは、元々あったものではなくて、寄席で、出番を待つ演者に、その日、前に出た演者が何をやったのか、を知らせ、同じ日の同じ客に同じ話を聞かせな

いようにするため、一種の符号が演題になったものだと思います。ですから、話の内容が判っていないと、何が何だか判らない、という演題もあるのです。太鼓持ちの久蔵が富に当る話で「富久」、お金を見たことのない若様が、お庭で穴明き銭を拾って「これはお雛様の刀の鏝ではないか」と言う場面がある話、ということとで「雛鏝」。船頭になりたかった若旦那の徳次郎(?)の話なので「船徳」。「駒長」なんて、何だろうと思つと、長兵衛とお駒という名の夫婦の話だった、なんて酷い演題もあります。

富くじの話は、他愛がなくて無難なので、題材になることが多いように思います。貧乏に引つ掛けるケースが多いので、年末の話題になることが多いようです。「富久」「御慶」「水屋の富」「宿屋の富」なんかを持っています。「宿屋の富」は特に好きな所為もあつて、「ご丁寧にも、志ん朝のものを二本、志ん生のもものと小さんのものに加えて枝雀のもの(関西では「高津の富」と言いますが、これがオリジナルだとのことです)を夫々一本ずつ、合計五本持っています。長い話ではありませんが、話の中に山が幾つもあつて、何度も笑わせてくれます。中でもテンポの早い志ん朝のものがお気に入りです。話

の中のことですから、当り籤の番号なんて、何番だって良いと思うのに、誰がやっても同じ番号、というのも何か面白い気がします。番号にも調子の善し悪しがあるのか、口移しで習うので、同じ番号になるのか。富くじの話で、一番良く出来ていると思うのは「富久」。太鼓持ちの久蔵が富を買う序から、二つの火事騒ぎ、大神宮さまのお被いの落ちまで、話にスキがありません。

侍ものも一つのジャンルに入ります。堅苦しいお侍と、ざつくばらんな職人の対比で笑わせるのはお決まりのパターンですが、代表は「妾馬」ということになるのでしょうか。「妾馬」は志ん生のもものと円生のもものを持っていきますが、夫々に味が違って面白いと思います。「柳田格之進」とか「井戸の茶碗」なんて、真面目なお侍の話もあるし、遊びの好きな「盃の殿様」なんてのもあります。「火焰太鼓」なんかもこのジャンルに入れて良いのかも知れませんが。「火焰太鼓」は志ん生があまりに有名なせいか、志ん生以外、誰もテープにしないように思います。田舎で探し方が悪いのかも知れませんが。志ん朝の「火焰太鼓」を大分前に一度テレビで見たことがあります。もう完成の域に

達していると思いました。東京辺りで、若しテープでもCDでも見つけた方がいたら、買って欲しいと思います。「一番煎じ」なんて話は、昔の町人の暮らし振りを語る良くて出来た話だと思えますが、これも最後にお侍が出て来て落ちをつけますから、このジャンルに入れても良いのかも知れませんね。「粗忽の使者」なんて、お侍とお職人の差が、極端に出た作品で、何度聴いても面白いと思います。

長屋が題材になっている話も多くあります。代表的なのが「長屋の花見」でしょうか。「寝床」とか「お化け長屋」なんかも、いかにも長屋の風景を語っていると思います。鳶の頭、お妾さん、剣術の師範が一緒の長屋に住んでいるという設定の「三軒長屋」なんて、良く出来た話だと思えます。長屋の嫌われ者の無頼漢が河豚に当って死んだ後現れた、もっと酷いやくざの兄弟分と、気が良いけれど酒癖の悪い屑屋（これは「廃品回収業者」では全く話になりませんね）の掛け合いが面白い「らくだ」なんかもこの範疇に入ると思います。「らくだ」は可楽のものと志ん生のもの、それに小さんのものを持っていきますが、夫々の味が出ていて面白い。「らくだ」は戦後すぐの頃、エノ健が映画

化したことがあって、祖母に連れられて見たことがあります。帰って来て、その物真似をしたのが好評で、暫くの間は、何かの集まりがあると、亡くなった祖母やこれも亡くなった叔母にせがまれて、余興として「へい、仕方がゴザイマセン」と言うエノ健の肩屋の物真似をさせられたのを懐かしく思い出します。

お芝居を題材にしたものも沢山あります。芝居には全く詳しくないので、あまり専門的で本格的なものは困りますが、笑わせながら、人情を感じさせる話が多いように思います。「文七元結」なんてのは、歌舞伎の世話物にもあると聞きます。志ん朝がやっても、最後はホロリとさせてくれます。「淀五郎」とか「蔵丁稚」など、忠臣蔵の五段目、判官切腹の場、を題材にしたものが多いのは、やはり一番ポピュラーな芝居は、昔から忠臣蔵ということでしょう。

忘れてならないのが廓もの。この辺になると、我々は余程解説を加えて貰わないと判りません。最近では誰がやっても、枕で上手に解説を加えてから話しに入ってくれます。昔はそんな必要はなかったのですが。「明烏」「付き馬」「居残り佐平次」「木乃伊取

り」「お見立て」など夫々の切り口で廓を紹介してくれます。志ん生が得意にしていた「お直し」なんて話は、最下層の廓の話で、昔はこんな酷いところもあったのだろうか、と信じられない思いもありますが、ここまで来ると雰囲気を感じることすら難しくなります。「品川心中」なんか良く出来た話だと思えます。志ん生と円生のものを持っていきますが、前に聞いたことのある志ん朝のものが忘れられません。これもテープを見つけた人がいたら、買って欲しいと思います。「五人廻し」なんて酷い話もあるし、お女郎の手練手管を紹介する「文違い」や「お茶汲み」「三枚起請」くらいなら、様子が想像出来ます。「唐茄子屋政談」なんて話も、散々廓に通った若旦那が親に勘当されて苦勞する話ですから、これも反省の弁、と言うことで廓話の範疇に入れても良いのかも知れません。

落語に出てくる子供は、コマツシャクレっていて、ボンヤリした親を困らせるのが一つのパターンです。真田幸村の講談で、親をゴマカして、小遣いを騙し取る「真田小僧」。お上品に育てられた若様と逞しく育った職人の子供の対比が面白い「雛鰯」。抜群に賢

い桶屋の職人の息子がお奉行に認められ、出世して行く「佐々木裁き」なんて話もあります。これなんかは、伝記もののジャンルに入るかも知れません。一時の迷いで夫婦別れをしていた夫婦が、子供の力でめでたく復縁する「子別れ」なんかも良い話です。子は鎧（かすがい）が見事な落ちに使われています。

方言を題材にしたものもあります。「百川」辺りが代表かと思いますが、田舎のお大尽を扱った「文違い」や「五人廻し」。素朴な田舎出の飯炊きが活躍する「木乃伊取り」など、面白いものがあります。ただ、このジャンルの話は、下手をすると、田舎の人を馬鹿にすることになりかねませんから、用心する必要があります。何時でしたか、今の円歌（野口兄 以前、「山のあな、あな・・」で売っていたのは円歌でしたよね）が寄席で、方言をかなりドギツクやって、客席と喧嘩になった場面に出会ったことがあります。方言をそれなりに尊重する姿勢とか、方言に対する暖かさ、みたいなものがないと、オカシなことになるのではないかと思えます。その点、円生とか志ん朝の話には、この辺への配慮が感じられて、流石と思わされます。「錦明竹」もこのジャンルに入る

のかも知れませんが、関西弁の早口言葉遊びみたいなもので、誰のを聞いても、面白いと思っただけがありません。

あと、与太郎ものとか、けちん坊の話、キザな若旦那の話、太鼓持ちの話等々、上げて行くと切りがありませんね。

噺の内容を知っている人には、上に挙げた演題で、ああ、あの噺か、と思い出して頂いて、それなりに楽しんで頂けるのではないかと思うのですが、噺を知らない人にとつては、何のことか判らなくて、面白くも何ともない話題でしたね。ご勘弁を願っておきます。でも、私は落語は立派な日本の芸術だと思っています。時代の流れとしては、他の多くの古来の芸術同様、衰退して行く運命にあるのかも知れませんが、落語ファンが一人でも多くなって、支えて貰いたいと思っています。

なお、私のテープは多くがもう古くなって、擦り切れていて、音質も悪いのですが、ご希望があれば、ダビングして送りますので、お申し出下さい。

(平成八年十一月一日)

・その後、勉強した結果、志ん朝は一九七八年、四十才のとき、自分のテープを残すことに同意したのだそうです。それまでは、ディレクターが五年ほど掛けて説得したそうです。落語はその場限りのもの」と言つ信念が強くて、許してくれなかったのだそうです。平成八年にはもう許しが出ていたのですから、多くのテープが出ていなかったのには別の理由があつたのでしょう。没後、発売されたCDで「火焰太鼓」も「品川心中」も手に入れました。

(平成十七年六月五日)

古今亭志ん朝を聞きました

私が、大の古今亭志ん朝ファンであることは一九八〇年八月に一度書いたことがあります。読み返してみると、私が志ん朝ファンになつたのは、三十年近く前のロンドン時代のことのようにです。当時、留守宅で録音して送つてくれていた落語のテープの中に志ん朝のものが幾つかあって、車を走らせながら何度も聞いている内に好きになつた、と書いてあります。この時はまだ生の高座を聴いたことがなく、いつか聴きたい、との思

いが綴つてありますが、東京では機会が作れず、ハウステンボスに来てから一度、長崎でやった時、聴きに行きました。

この三月に佐世保の駅前にアルカス佐世保と言う県民ホールが出来、ハウステンボスから応援に向させた営業の責任者が、オープニング記念の出し物の一つとして落語をやりたい、と言うので、「是非、志ん朝にしろ」と言っておきました。その責任者は、志ん朝なんて名前すら聞いたことがなかったようですが、結局、志ん朝をやることが決まり、アイデアを出した功績（大袈裟ですが）が認められてか、招待券を貰いました。勿論、金を払っても行く積りでしたから、張り切つて出かけました。この田舎にも落語愛好家は結構いるようで、三五〇人収容のアルカスの小劇場は満員の入りでした。

この高座が三月二十六日だったので、三日前の二十三日の新聞で志ん朝が二〇〇〇年度の芸術選奨を受けることになった、とのニュースを聞いていたので、出のときにタイミングを計って、「オメデトウツ！」と声を掛けて上げました。聞こえたらしくて「こんな声を掛けて貰えるとは思わなかった」と言う切り出しから、こんな声を聞くと

得をした様な気がする。という話になり、気分が良いのでメッタに話さないことを話す、
と言つて、逆にやり難いお客さんの話を枕にしていました。

演目は「船徳」。ご大家の若旦那が、舟遊びが好きになつて船宿に居候している内に、
自分が船頭になりたい、と言ひ出し、大騒ぎになる話。私も本人のテープを持っていて
何度も聞いている話ですが、やはり見ると聞くとは大違い。何とも言えない色気があつ
て、益々ファンになりました。

五・六年前に長崎で見たときは、肥つて脂ぎつた感じがあつて、如何にも親父の志ん
生譲りの大酒飲み、と言ふ感じてしたが、昨年大病をしたとかで、今回は少し痩せて、
油が抜けて枯れた感じが出ていました。押しも押されぬ大看板。落語協会の副会長、と
言ふことで大きな顔をしていても良いところですが、受賞のインタビュー記事なんかを
読んで、遠慮がちと言ふか控え目なところすらあるのが却つて好ましい感じですよ。

でも、話は抜群。笑わせてやろう、客に受けてやろう、と言ふ気負いもなく話してい
るのですが、それが可笑しい。語り口や一寸した仕草に艶というか色気があつて、笑い

ながら感動していました。やはり落語は芸術です。あまりにも良かったので、ファンレターを出すことにしました。自宅の住所が判らないので、落語協会気付けにして次のような手紙を書きました。

拝啓

花冷えの候、師匠には益々ご隆盛の段、お慶び申し上げます。

この度は、芸術選奨の受賞、誠におめでとございます。

初めてお便りしますが、私は受賞前日の三月二十六日、長崎・佐世保のアルカス佐世保で「オメデトウ」のひと言をかけた者です。

あの夜は「船徳」をタツプリ聞かせて頂きました。師匠の「船徳」はテープで持っています。生の高座の味は格別で、面白いと言つより感動を覚えました。五・六年前長崎に来られたときも拝見しましたが、更に一段と艶と言つか色気を感じ、拝見して本当に良かった、と思つています。

私は六十三歳。師匠と同年輩ですが、昔からの大ファンで、大分前に発売されたソニーのテープは全部求めましたし、その後発売されたCDも全部持っています。最近、テープやCDが発売されないので淋しく思っています。生で聞くのが一番ではありませんが、生で聞く機会が減多にない地方のファンのためにも是非出して頂きたい、と思っています。ビデオならもつと嬉しく思います。

大分前にテレビやラジオで伺った「火焰太鼓」や「品川心中」は、もう完成品だと思いますし、受賞の理由になったと言う「三枚起請」も是非入れて頂きたい。どうぞよろしく願います。

昨年は大病をされたやに伺いましたが、どうか呉々もご自愛の上、未永く我々を楽しませて下さい。

師匠の益々のご隆盛をお祈りします。

敬具

平成十三年四月二日

このファンレターに対して、返事が来たのです。それも不思議な形で・・・

四月十二日、志ん朝に会った夢を見たのです。何だか色んな話をしていて、テープについても、自分が録音したものを送ってあげましょう、なんてことを言ってくれていました。朝から、これは正夢かも知れないね、なんて話していたのですが、夕方、郵便箱を見たら志ん朝自筆の葉書が届いているではありませんか。正に正夢だったのです。内容は次の通りです。

始めまして、先日はお手紙をありがとうございました。

あの折のご声援、とてもうれしかったです。あんまり

報道がなかったので、知り合ひの方でも私の受賞を

知らない人が随分いたんです。だから余計うれ

しく思ひました。これからもう一層精進いたします。

どうぞよろしくお願ひ致します。 乱筆乱文

又、葉書での返信お許し下さい。

二〇〇一年四月十一日

新宿矢来町の自宅からの発信です。 良い記念品が出来ました。

今日は「時間が出来たので、こんなことをして遊んでいますよ」と言うことでご紹介
しました。
(平成十三年五月五日)

志ん朝の死

十月一日、志ん朝が亡くなりました。 当日朝、志ん朝に夢中仲間の友人(志ん朝気違
い、と書きたかったのだけど、私の嫌いな差別用語とやらの影響かワードのワープロに
は「気違い」の文字はありませんでした)からの電話で第一報を受けました。 残念なこ

とでした。古典落語をジツクリ聞かせてくれる落語家が又一人いなくなりました。ニュース・ステーションの「最後の晚餐」シリーズの志ん朝は勿論見ました。久米宏が、志ん朝本人よりも志ん生のことに多く触れていたのが気に食わなかった。うまさに加えて、艶にしても品にしても粹にしても、私は志ん朝は名人志ん生を越えている、と思っています。志ん朝が最後の晚餐に選んだのが「うなぎ」でしたね。うなぎが丑年の人の守り神なので、大好物なんだけど断っている、と言う話は聞いていましたが、最後の晚餐のメニューとして選ぶとは思いませんでした。ただ志ん朝は昭和十三年生まれの筈なのに、丑年の守り神、と言っているのが未だに疑問です。丑は私の年で、昭和十二年ですから。肝臓ガンとのことです。最後に「うなぎ」を食べることが出来たでしょう。東京會館での志ん朝は、ニュース・ステーションの時よりも痩せて油が抜けた感じで、この「最後の晚餐」は大分前に集録したものではないか、と思われました。私が、再起可能だろうか、と疑問をもった根拠もここにありました。若しかしたら、ニュース・ステーションはDデイが近いことを知って、昔収録したものを急遽放映したのではないかと

思いました。(後で聞いたら、収録は七月七日のことでしたから、私の推測が当たっていたことになります)NHKの「ふしぎ草紙」と言うシリーズものでナレーションやっていましたが、流石に落ち着いた江戸の良い味を出していました。とにかく残念なことでした。今は、他の人の落語を聞きたくもありません。これで私の落語熱も大分下がるのではないか、と思っっています。偶然とは言いながら、直前に二度、生の高座を聴く機会が持てたのは幸せだったし、ファンレターを出したのも良かった。返事の八ガキは宝物になりました。最後のレターに返事は来なかつたけれど、キツと読んで喜んでくれたものと信じています。

(平成十三年十月十日)

志ん朝復活

くどいようですが、未だに二〇〇一年(平成十三年)十月一日に亡くなった古今亭志ん朝に拘っています。小林信彦という我々より少し年上の作家がいますが、この人が大変な志ん朝贗真で、昨年の一月に「名人 志ん生そして志ん朝」と言う本を書いていま

す。玉川兄が発見して買ったということと廻してくれました。この中に「志ん朝の死によつて、僕の老後の楽しみはみごとに失われた」という一文を発見し、私が言いたかったことをひと言で言ってくれたような気がしています。私は志ん朝の高座は、長崎に戻つてからの三度しか観ていません。演目が「王子の狐」「ぞろぞろ」「船徳」「三枚起請」。東京にいる頃ならいくらも観る機会があつたのでしように、この間は全く観ていないのです。会社を定時に退社するなんて考えたこともなかつたような生活をしていたので、六時とか七時に始まる独演会なんか事前に予約する頭なかなかつたのでしよう。ミュージカルでも演奏会でもバレエでもお芝居でも同じこと。田舎に来た今になつて、そんな文化に接する機会を与えられていたのに何故活用しなかつたんだらうか、と後悔しています。当時は、いつでも行けると言つた感覚だったので、東京近郊に住んでいる、というそのこと自体が如何に恵まれた環境にあるのか、が判らなかつたのです。ロンドンから帰つて間もなく、三宅坂の国立劇場のホールで志ん朝の独演会をやることを知りました。先物の時間の予定が作れないので、予約の余裕はなかつたのですが、当日定時に会

社を飛び出し、開演時間ギリギリに駆けつけたことがありました。当日券なんて売り切れで全くある訳はなくて、受付の人に、今頃何しに来たんだ、と言わんばかりの顔をされたのが忘れられません。会社生活を終えて時間が出来たので、志ん朝の追っかけでもやってみたいと思っていました。私は知りませんでした。この十年ほど、年に一度、秋に名古屋の大須演芸場とか言う小さな劇場で三夜連続の独演会をやっていたのだそうです。これだつて行けたのに「老後の楽しみの一つが失われた」と言う事です。落語に対する愛着も薄れたままになっています。

私は昔から落語ファンではありませんでしたが、志ん朝を知つてからは「志ん朝の落語」のファンだったのだと思います。江戸っ子そのものを感じさせてくれる江戸弁の口調や間、晴朗な声、何となく品と艶があつて粹で華と色気のある仕草、明るくて人柄が滲み出るような温かさ。志ん朝の落語には悪人は出て来ないのです。悪人でもどこかに人の良さや可愛さが出て来る。何か温かいものを感じさせてくれるのです。聴衆に対する思いやりも好きでした。古い言葉や事柄で、昨今の聴衆には馴染みがないものが話の中に出て

くるときは必ず枕でさりげなく解説しています。枕と言うのは、本題に入る前にその場を自分の雰囲気馴染ませるためのもの、とされています。座を暖める、なんてことも言われます。志ん朝はこの枕を利用して押し付けでなく上手に解説するのが上手かった。「大工調べ」では落ちになる「細工は隆々仕上げをご覧しろ」を、「明烏」では、これも落ちに使う「三千世界の烏を殺し、主と朝寝がしてみたい」の都々逸を、「富久」では落ちで重要な役割をする「大神宮さまのお被い」をキッチンと解説しています。こうした思いやりは用意周到という感じすらしました。それと、どことは言えず感じられる謙虚さが好きでした。若い頃から、レコードを出したい、とアプローチしてくるプロデューサーには皆お断わりをしていたそうです。「芸は瞬間に消えてこそ素晴らしい。残すものではないんです。それにまだ、残すほどの芸ではないよ」と言っていたと言います。一寸売れるとカセット・テープを出す最近の若い落語家に聞かせたい言葉です。レコードのリリースを許したのは、四十歳の夏だったと聞きます。ディレクターがお願いを始めてから五年も経ってからのことだったそうです。この辺にも志ん朝の謙虚さが現れて

いると思います。

志ん朝の一周忌に合わせた形で、一昨年秋、志ん生の長女、つまり志ん朝の長姉が「三人嘶」と言う本を出しています。これも玉川兄が廻してくれました。長女美津子が思い出を喋ったのを編集者が聞き書きしたもの、という方が正確でしょう。一九二四年生れの美津子は、長男の馬生とは四つ違いですが、次男の志ん朝とは十四も違つのですから、親代わりみたいなものだったようです。志ん生を始めとする美濃部家の歴史が微笑ましく描かれています。若い頃の志ん生の貧乏振りは有名ですが、志ん朝が生れた頃はもう貧乏から脱け出した頃で、江戸っ子そのものの家庭の中で、名人志ん生（七三年に八十三歳で逝去）、賢婦人のりんさん（七一年に七十四歳で逝去）、兄の馬正（八二年に五十七歳で逝去）、親代わりの美津子に囲まれて、志ん朝の粹で温かい雰囲気はどうやって育まれて来たか、が判るような気がします。その美津子が、志ん朝はあと十年もしたら、お父さんを越える嘶家になってたと思うんですよ」と言っています。実は、私の評価はもっと高く、既に志ん生を超えた、と言っても良いんじゃないか、と思っっていますが、

身内の判定ですからこの辺が良いところなのかも知れません。

一昨年秋「志ん朝復活」と言う十二枚組のCDが出ました。副題が「色は匂へど、散りぬるを」。志ん朝の散ってしまった色香、を示しているのだと思いますが、CDが「い」から「を」までの十二枚と言うのも洒落ています。我慢が出来なくなつて、乏しい蓄えを削つて求めました。調べてみると私がついているCDはこれ以外に十八枚、その前に出たカセット・テープを全部で二十四本持っています。CDとカセット・テープの内容がダブっているのもありますから、これが全部違った嘶、と言う訳ではありませんが、志ん朝が出したCDとカセット・テープは全部持つている、と云つて良いでしょう。CDは車で聴くと盤面を傷めそうですし、テープもオリジナルのものを繰り返し聴くとテープが伸びて音が悪くなるので、自分のテープにダビングし直して聴いています。と言うことで私のカセット・テープのケースは志ん朝で溢れています。玉川兄には病気見舞いを兼ねて幾つかテープを作つて送りましたが、ご希望があれば諸兄にもお届けします。

声だけでは物足りず、映像も見たいと思ってビデオ・カセットやDVDを探していますが、これが中々出て来ないので。先日、新宿の紀伊国屋に行ったとき、出ていないのかどうか、出す予定はないのか、聞いてみました。応接をしてくれたのが良く判った店員で、DVDで他の壺家に混じって一席分だけある、とこのことを探してくれましたが、それは売り切れでした。志ん朝だけのものはまだ出ていないとのこと。ソニーが版權を持っているらしく、CDはソニー・ミュージックが出していますが、これが爆発的に売れているので、売れている間はDVDにはならないのでしょうか、と聞いていました。映像はNHKのアーカイブなんかには沢山取ってあるのではないかと思えます。ビデオやDVDになれば、又買いたくなるでしょう。物要りで困ったものです。

(平成十六年三月五日)

この項は、紀行文に含めた分が多いが、それ以外の分を紹介してみる。

シェクスピア（ロンドンボケ便り 二）

シェクスピアの国に来てシェクスピア劇の一つも観ねば話にならぬ、と思い、帰国間際になってやっと一度観て来ました。シェクスピアが生まれ住んだところはロンドンから北西に九〇マイルほど行ったところにあるストラトフォード・アポン・エーボンと言ったところ。静かな小さな町です。繊維商人の子に生れたシェクスピアが住んだ家は、チャールズ・デイケンズの発起でそのまま残されています。十六世紀の木と石を主体とした家で、中は博物館のようになっています。訪問者の署名リストがあり、現女王のサイ

ンもありました。昔は二階の風呂場のガラスに、ダイヤモンドのかけらなんかで自分の名前などを刻むのが例になっていたとのことで、有名人のいわゆる落書きが残されていました。いまはそんなことはさせてくれず、番をしているオバサンに、僕にもやらせてくれないか、と聞いてみたら、有名人でないから駄目だ、って断られました。一寸郊外にシエクスピア夫人アン・ハザウエイの家と言つのがあつて、これも典型的な昔の農家として残され、観光地の一つになっています。運河のほとりに公園があり、シエクスピアの銅像があります。銅像を囲んで、ドクロを持つて考えているハムレット、王冠を捧げ持つリア王、マクベス夫人等の像があります。この公園の前にシエクスピア劇場があつて、劇をやつていふと言つて諷刺。ストラトフォード自体には前に車でも行つたのですが、劇となると切符を買つたりするのが大変なので、バス・ツアーにしました。土曜日の早朝ロンドン発、大学都市オクスフォードに一寸寄つてストラトフォード入り。その日の出し物は「コメディ・オブ・エロス」。あまり聞いたこともなく筋も判らないので、子供のために書かれた解説書を借りて予習しました。これは十九世紀末にチャールズ・ラ

ムと言う人が書いたシェクスピア解説の古典みたいなもの。一寸古めかしいけど英語らしい英語と言うのでしょうか。判りやすい言葉で書いてあります。読んだ限りでは無理に作った話みたいで少しも面白いと思わなかったのですが、劇になると流石に見せてくれました。筋はそのままですが、時代をスツカリ現代風にしてしまい、テンポの早いドラマの味が出るようになっていて、一部ミュージカル風にもなっています。プログラムを見ると、昔から色んな形で演じられているようです。シェクスピア劇と言うと、古い衣装に古い言葉でやるのだろうと思っていたのですが、こうした古典は衣装とか時代に拘らず楽しめるものだと言うことが良く判りました。劇中の言葉は中々判りづらいのですが、予習のお蔭で筋が判るので、三時間の劇をスツカリ楽しみ、他の観客と一緒に笑って笑って満足して帰ってきました。

(昭和五十二年一月三日)

カーネギー・ホール

大分昔「カーネギー・ホール」と言う映画を見たことがあります。長崎で母に連れて

行ってもらった記憶がありますから、小学校高学年か中学生の頃、四十年近く前、ということになりますか。ピアノを勉強しているトニーという若い男がいて、これが苦勞しながら段々に名を挙げて行つて最後は憧れのカーネギー・ホールで演奏する、と言う筋です。あの最後のシーンは今でもハッキリ覚えていゝのです。舞台の左端にピアノがあつてトニーが座り、真ん中の方にフル・オーケストラが並んでいます。トニーが何か少し弾いて手を止め、サツと指差すとトランペッター（確かハリー・ジエームスだつたと思う）が立ち上がつてソロを始める、というその辺が格好良くて感激したものです。その頃、長崎にN響だか何だか、当時では珍しいフル・オーケストラが来て、三菱会館で演奏したときも確か母と行つたのですが、生の演奏にこれまたスツカリ感激してしまつて、将来は指揮者になるんだ、なんて暫くの間は真剣に考えていたものです。今からでは想像して頂けないでしょうが、何せ小学校低学年の頃はきれいなボーイ・ソプラノで鳴らし、学芸会になると学年代表で独唱したことがあるし、これでも音楽の点は結構良かったのですから、旨くすると指揮者位にはなれる、と思つたのも無理はなかつたの

かも知れませんが。

カーネギー・ホールというのは、USステイールの創始者で鉄鋼王と言われたアンドルー・カーネギーが建てたもので、正確には知りませんが二十世紀も極く初期に建てられたものだと思います。むしろクラシック音楽の殿堂で、今でもそんなのでしょうが、昔から、音楽家である以上一度はカーネギー・ホールで演奏するのが夢、と言われていきます。何時だったか日本人として初めてアイ・ジョージが出演して話題になったことがあります。

と言う訳で、カーネギー・ホールは私にとっても憧れの場所で、一度は行きたい、行きたいと思っていたのですが、これまでのニューヨーク出張では機会が作れず、仕事の途中で外から眺める程度でした。

今回は、週末中に東岸から西岸に移動すれば良い、という日程になったので、ゴルフの誘いを曲げ、西への移動を日曜日の最終便にしておいて、土曜日のマチネーに行ってきました。電話で申し込んだら、切符はある、と言います。当日でも少し早目に来れば

大丈夫だろう、とのことでしたが、万一のことがあっては何にもならないので、態々前日に買いに行き、二十二・五ドル払って一番良い席を確保しました。建物は古いレンガ造りのドツシリしたもの。昔の映画では何かもう少し小さい感じがしたけど記憶違いかも知れません。中に入ると壁に有名な音楽家の写真が、割りと粗末な額に入れられて飾っております。ここで演奏した人たちの記念なのでしょう。残念なことにユックリ読んでいる時間がありませんでした。と言うより眼鏡を持って行かなかったので、少し暗い建物の中では細かい字を読むのが少々オツクウだった、という方が正直なところです。

今回は別に有名な人の演奏ではありませんが、フル・オーケストラに男声合唱の入ったもの。ニューヨーク・ポップスと銘打ってあるだけにポピュラーなもの。「金髪のジエニー」に始まり「夢見る人」「ケンタッキーの我が家」などフォスターのものが中心。最後は「ダニー・ボーイ」と判り易くてかえって良かった。それよりも何よりも自分は今憧れのカーネギー・ホールに座って音楽を聴いているんだ、という気持が何とも言えず、音楽そのものより雰囲気酔った感じでした。円高を計算に入れなくても誠に安い

二十二ドル五十セントでした。

(昭和六十二年五月三十一日)

クローン人間ナマシマ

昨年二月頃の日経新聞で、哲学者の梅原猛が「クローン人間ナマシマ」と言うスーパー狂言を書いて、これを国立能楽堂で披露すると言う記事に接しました。梅原猛については、私は全く詳しくなくて、関西の哲学者、と言う程度の知識しかなかったので、哲学者と狂言作者とが結びつかず、記事を見た時、「アレレ？」と思ったのです。ヤフーで調べてみると、一九二五年生まれ。京大哲学科卒で、立命館大学の教授を経て京都市立芸大学長を勤め、長らく国際日本文化研究センターの所長を勤めた後、退いて現在はこのセンターの顧問をされているとのこと。仏教を中心とする哲学者だが、最近では古代研究者とも言われている、と紹介されています。日経の記事によると梅原さんは二十五年程前に、スーパー歌舞伎と称して「ヤマトタケル」を書いて歌舞伎作者となり、その後、「オグリ」など、市川猿之助のスーパー歌舞伎を手掛けて来たそうで、三年前

(二〇〇〇年)に初めて「ムツゴロウ」と言う狂言を書いて狂言作者になって、今回はスーパードラマ第二作目と言うことでした。何だか面白そうだな、見てみたいな、と思っていたのですが、昨年四月に上京した時、丁度二日間の東京公演の時期に当たったので、観てきました。

これまで実際にお能を観たのは、ハウステンボスで薪能をやったことがあった時、これが一度きりです。ですから能楽堂なるものにも縁がありません。一度、奈良の会社で何十周年かの周年行事を奈良の能楽堂でやったところがあって、その時、初めて能楽堂に足を踏み入れたことがあるのみです。国立の能楽堂なんてどんなものなのか、こちらにも興味がありました。昔は水道橋にあつたように記憶していたのですが、今は千駄ヶ谷にあります。神宫外苑の一角に広い敷地を取って、立派な平屋の建物がありました。八三年に出来た、と書いてありましたから、昔、水道橋にあつたと言う私の記憶は間違っていないかったのかも知れません。千駄ヶ谷の駅からすぐ近くなのですが、門をくぐる、と、緑に囲まれ、砂利が敷き詰められたアプローチがあつて、そこはもうスツカリ静か

な日本そのものの雰囲気になっています。建物も、流石に和風建築ではないけれど、和風の雰囲気を出す工夫が見られます。入って行くと正面に白木の舞台があり、左に橋掛（はしがかり。歌舞伎で言う花道）が流れていて、その左端に揚幕（あげまく）が掛かっているのは、奈良の舞台の形と全く同じでした。非対称の特殊な形の舞台に合わせて座席が作っておりますから、席の配置も独特で面白いと思えました。五九〇席と言われる座席はほぼ満席で、私が買ったのは脇正面と言う端っこの席でしたが、それでも席が取れたのはラッキーでした。

最初は「花折（はなおり）」と言う古来の狂言でした。開演時間が近づくと、「開演五分前です。席にお付き下さい」と言うアナウンスがあります。別に開演のブザーが鳴るでもなく、音曲が始まるでもなく、カーテンみたいな揚幕がスーッと上がるとシテ役が音も無く登場して橋掛をすり足で進み、舞台上がって狂言が始まります。能とか狂言と言うのは、お謡いが主役で難しいもの、と言う印象で考えていたのですが、簡単なストーリーではあるけれど、言葉も分かり易く、初めての私にも十分楽しむことが出来

ました。お花見の宴席で騒ぐシーンで、皆で「ヤンヤ、ヤンヤ」と言つて騒いでいる様を演じているのが何とも可笑しかった。

二十分の休憩の後、お目当ての「クローン人間ナマシマ」が始まります。どんな衣装で出て来るのだろうか、と楽しみにしていると、野球のユニフォームを和風に変えたみたいない不思議な服装の人が出て来ます。デザインは画家の横尾忠則。

第一声「まかり出たる者は、メリケン国・グランド・リーグのスカウトでござる。昨年は八チロウを買い求めてござるが、今年はこのナマシマ監督が退団致いた東京ジャイガントのマツキ、キヨウミ、タカガワ選手をスカウトに参つた」と自己紹介して、狂言が始まります。早速、三人との交渉に入りますが、人買いのテクニクもツボを心得ていて、マツキ（松井のこと）にはお金もさることながら、バリー・ボンズに代わつてジャイアントの四番を打たせる、と言つ殺し文句を使って落としますし、関西弁でめつく金銭面のネゴをするキヨウミ（清原のこと）には、女の話を出したりして説得します。タカガワ（高橋のこと）には、八チロウ（イチローのこと）と一緒にプレーさせて

上げる、と言って説得する辺りは本物の三人の性格や特徴が表れていて中々見事です。ナマシマ（長嶋）前監督も出て来ますが、やたらと横文字を使ったりして、これも笑わせます。ナマシマ前監督を演じたのは、人間国宝の茂山千作ですが、狂言師が横文字を使うのも面白い。結局、三人ともスカウトされることになり、困ったのがジャイガンツの社長。このままでは自分が首になる、と言うことで、クローン人間が作れると言うキートン博士のところに行つて、ナマシマ選手のクローンを七人作つて貰うことにします。居眠り中のナマシマ前監督の髪の毛を盗んで来て、首尾よく七人のスーパースターが出来、投手と捕手を除く全員がナマシマと言う強力なチームが出来ます。最初は上手く行つて連戦連勝なのですが、その内に、七人の皆が「サードで四番を打たせろ」と騒ぎ出し、収拾がつかなくなります。最後は、ナマシマ前監督がメリケン国に行っていた三人を「お金よりも、イワユルひとつの心だ」と言う精神論で説得して取り戻し、メデタシ、メデタシとなります。

ここまででは、たわいの無い話なのですが、ここから本論と言うべき部分に入ります。

クローンを作る時、ナマシマ前監督の髪の毛を使ったのですが、これに原作者のキートン博士の髪の毛が一本混じっていたことから、キートン博士のクローンが出来てしまい、博士の奥さんが「本物の博士より、若いクローンの方が良い」と言い出して、本物のキートン博士は追い出されてしまう、と言うのが落ちになっています。クローンの恐ろしい部分を最後に一寸出して世の中に警鐘を鳴らす、と言うのが梅原猛の言いたかったことではないかと思えます。

長嶋茂雄氏も観劇していたらしく、最後に舞台に引っ張り上げられて挨拶をさせられていました。長嶋監督の話は、読売新聞の何周年だかの記念式典に出席した時、監督の現役だった彼が出てきて挨拶していたのを聞いたことがあります。気ばかりが先に行つて、言語明瞭、意味不明の話をする人だ、と思ったことがあります。今回はつばを心得た話で、中々素敵でした。

脇正面という私の席は、舞台の正面ではありませんが、役者が出たり引っ込んだりする時の通路に当たる橋掛の真正面に当たるので、長嶋氏も退場時に間近で見ることが出

来て、かえって良い席だったな、と思いました。

珍しく、日本古来の芸術に接する機会があったので、ご紹介してみました。

(平成十五年一月十日)

映画

私の映画ベストテン

映画館に行つて映画を見る機会が少なくなつて久しいのですが、昨年は二回行きました。いずれも娘と一緒に。ベトナム戦争を描いた反戦映画「プラトーン」とウディ・アレンの「ラジオ・デイズ」。プラトーンは、聖戦を夢見て志願して来た若者が経験する戦争の醜さと愚かさを、これでもかこれでもか、と描いたもの。強烈な反戦映画として昨年の話題作の一つでした。ラジオ・デイズの方は、あまり話題にならなかつたみたいだけど、ラジオ全盛時代のアメリカを描いた実に洒落た作品でした。

映画館まで出かなくても見る機会が多かったのは、テレビもあるけど海外出張時の往復の機中。昨年の海外出張は四月のアメリカ、五月のオーストラリア、八月のインドの三回だけだったけど、それでも機会が六回あります。あとは外国のホテルでの深夜フィルム。「ハスラー」とか「バック・トゥ・ザ・フューチャー」「フラッシュ・ダンス」なんか面白かった。

文芸春秋の一月号に「史上洋画ベストテン」をアンケートし、一〇三作がリストアップされていました。見ない見ないと言いながら、私は映画を見ている方なんだな、と言うことを再認識しました。一〇三作の内五十一作は見ているし、記憶ではその内四五作を映画館で見えています。一〇三作を分析すると、この内六十六作が一九六〇年以前の作品で、いわゆる名画と呼ばれ、今なお語り継がれている作品に古いものが多いので、こう言う結果が出たのでしょう。流石に新しいものは見ていないものが多いのです。私が一番好きな「雨に唄えば」は六十九位だったけれど、長谷日出雄、立川談志、田中小実昌が鼎談している中で、二人がベストテンの中に入れていたのが嬉しかった。

先日、新聞で洋画配収ベストテンが紹介されていました。全部アメリカ映画です。これなんか一〇の内九つまで見ているし、その内六つも映画館で見えています。我ながら大したものだと思います。確かに私はアメリカ映画が好き。フランスものは洒落ているというけど何かベタベタして重いし、東欧ものには大作・名作が多いけれど暗くて深刻なイメージが強くてあまり見る気がしません。映画はやはり明るくて楽しいもの、壮大なスケールのものが値打ちがあるように思います。となると、どうしてもアメリカ映画ということになるようです。

私の映画ベスト・テンを選んで見ました。

一、「雨に唄えば」

いつだったか書いたけど、私に言わせればこれは傑作中の傑作。映画館で十四／五回は見ているし、テレビでやれば必ず見るし、今やビデオに取って保管してあります。

二、「グレン・ミラー物語」

音楽が素晴らしいけど、ジエームス・スチュアートとジューン・アリスンのコンビがピッタリで良かった。映画館では四／五回見たけど、グレンが戦死した後のクリスマスにラジオから「茶色の小瓶」が流れるラスト・シーンには毎回泣かされました。

三 「ナバロンの要塞」

これは一〇〇選には入っていないけど、強烈に印象に残った娯楽大作です。グレゴリー・ペック扮する登山家の将校ヒラリーが率いる突撃隊が、トルコかどこかにある馬鹿でかい大砲を持つナチの要塞を爆破する話。どこにでもある活劇映画だけど、私のどこかに触れるものがあつたのでしょう。

四 「風とともに去りぬ」

クラーク・ゲーブルとヴィヴィアン・レイ主演の誰が見ても名画。一〇〇選でもベスト四にランクされています。スケールの大きさがいかに映画・大作という感じだったと記憶します。

(見た・・・映画館で、テレビ他で)

五、「アラビアのロレンス」

ピーター・オートウールの青い澄んだ眼が印象的でした。広大な砂漠を主人公にしたスケールの大きい物語が見事でした。音楽が素晴らしかったですね。一〇〇選では十三位。

六、「スター・ウォーズ」

スチーブン・スピルバーグの作品は本当に夢があって面白い。最近はなんだか多作気味なので全部は見れないけど「バック・トゥ・ザ・フューチャー」なんか面白かったです。一〇〇選では六十四位。

七、「シエーン」

典型的勧善懲悪の見え透いたストーリーだけど、西部劇の一級品だと思います。アラシオン・ラッドの二枚目とジャック・パランスの敵役がピッタリ。子役も良かったですね。

一〇〇選では五十一位。

八、「ローマの休日」

何といつてもオードリー・ヘップバーン。スペイン広場の石段にソフトクリームを持って現われるシーンなんか今でも目に浮かびます。一〇〇選中十五位。

九、「第三の男」

ベスト一〇〇選中二位になっているけど、名作です。音楽といい、物語の設定といい。オーソン・ウェルズが暗闇から現われるシーンが印象的でした。ウィーンに行った時、あの観覧車と最後にアリダ・ヴァリが歩いて行った並木道にはなんとしても行きましたもの。

一〇、「戦場にかける橋」

これがベスト一〇〇に入っていないのがオカシイ位。感動しました。アレック・ギネス扮する英国人将校が、彼の率いる捕虜の一団の規律と意欲を守るために、日本軍に協力してクワイ河に大きな橋をかける話。ミッチ・ミラーの合唱も良かった。

この他、落とすのが残念だったのが「地上より永遠に」「パリのアメリカ人」「タワー

リング・インフェルノ」ほか沢山。他に全然話題にも残っていないし、名作にも選ばれていないけど、昔見た白黒映画で心に残っているもの。「俺たちは天使じゃない」、ハンフリー・ボガードとかピーター・ユスチノフら三人組は脱獄囚なんだけど、やることなすこと良い方に良い方に転んでしまい、悪人が天使になってしまふ話だったと思います。「マダムと泥棒」、アレック・ギネス扮するトンマな泥棒の話。いかにも怖い泥棒と人の良い未亡人の組み合わせが面白かったと記憶します。

ア！ もうこんなに長くなっちゃった。では又お会いしましょう。サヨナラ、さよなら。さよなら。

(昭和六十三年一月三〇日)

(趣味・娯楽編 了)